

近年のリトアニアの歴史的自己像

—— 記念行事をめぐる ——

梶 さやか

はじめに

1991年に独立したリトアニアは、民族のリトアニア人を基盤としたネイション形成を行ってきた。本研究では、近年のリトアニアの歴史的自己像——自らの歴史についての認識——を考察したい。歴史的自己像は、個人や集団のアイデンティティ、価値体系や志向と密接につながっている。他方で、歴史はネイションの統合またはネイションからの排除の道具として使われる。そこで、記憶と忘却によって歴史意識を涵養する記念行事、特に祝日を通じて、リトアニアの歴史的自己像を考察したい。リトアニアでは祝日のほかに公的な記念日も存在するが、主要な記念日である祝日、特に歴史を記念する世俗の祝日に分析的を絞る¹。

なお、バルト三国のうちリトアニアの状況は他の2国とやや異なっている。リトアニアの歴史はラトヴィアやエストニアではなく、ポーランドやベラルーシと関係が深い。また、ロシア人マイノリティの比率はバルト三国中最も低く、近年の独立運動の際の主たる衝突は、元来自国内に住んでいるポーランド人マイノリティとのあいだで起きた²。

1. リトアニアの20世紀史についての認識

まずは2つの独立記念日から考察を始めた。独立記念日の一方は、1990年のソ連からの独立宣言を記念する3月11日の「リトアニア独立回復の日」である。他方は、1918年のタリバ（評議会）によるリトアニアの独立宣言を記念する、2月16日の「リトアニア国家回復の日」である。両独立記念日の名称にある「回復」という語は、現在のリトアニア共和国と、ロシア帝国に支配される以前のリトアニア国家、そして何より戦間期のリトアニア共和国との連続性を示している。リトアニア政府は、リトアニアは1944-1990年のあいだソ連に「占領」されていたが、国家の法的な正当性を戦間期のリトアニア共和国から受け継いでいるとも主張している。この認識はエストニ

アやラトヴィアとも共通する。以下では、リトアニアの20世紀史についての理解が持つ問題を考えたい。

第一の問題は、戦間期と現在の2つのリトアニア国家の間の断絶と連続性に関する。現在、一般に、ソ連時代はリトアニアのネイション形成に否定的なものと捉えられている。しかし、戦間期においてリトアニア語話者の大多数は農民であり、彼らの国民化は完了していなかった。都市にはユダヤ人やポーランド人などの民族的非リトアニア人が住み、公式の首都でありながら実際にはポーランドに支配されていたヴィリニウス市でも、リトアニア人はごく稀であった。1940年にソ連によって返還された同市でリトアニア人が多数派になったのは、ホロコーストとポーランド人の「帰国事業」を経たソ連時代のことである³。だが、住民や領域の変化にもかかわらず、現在一般的な20世紀史の理解は戦間期のリトアニアと現在のリトアニアを同一視し、他方でソ連時代に歴史の大きな断絶を見ている。近年、ホロコーストやユダヤ人の歴史に関する研究が増えているとはいえ、こうした一般の理解はリトアニア人のナチス=ドイツへの協力や自発的なユダヤ人虐殺を看過する傾向にある⁴。また、ソ連時代にリトアニア社会の国民化がある側面では進展したことにも目は向けられない。

第二の問題は、2月16日の記念が戦間期の権威主義体制の指導者の顕彰につながる点である。1918年に独立宣言に署名したタリバで指導的な役割を担ったのは、のちに民族主義的な独裁者となるA. スメトナである。2月16日は、現行の世俗の祝日のなかで唯一戦間期から記念されていた。しかし戦間期においても、左翼はその記念行事の持つ保守的でナショナリスティックな性格を懸念し、1920年の憲法制定の記念行事をより重視していた⁵。

2. 「中世から続く」リトアニア

リトアニア国家の起源に関わるもう一つの祝日が、7月6日の「国家の日」である。中世リトアニアのミンダウガス王の戴冠を祝うこの日は、エストニアやラトヴィアより格段に古いリトアニア国家の起源を象徴している。ミンダウガスは1251年にカトリックの洗礼を受け、翌々年にリトアニア王として戴冠した。彼の暗殺後リトアニアは異教に戻ったが、ミンダウガスはリトアニア史のなかで重要な位置を占めている。それは、彼が単なる公ではなく、史上唯一のリトアニア王であり、国家の創設者と見なされているからである。もう一つの理由は、ミンダウガスの戴冠が、13世紀にすでにリトアニアが西ヨーロッパと良好な関係を保持していた証左となるからである。リトアニアがNATOやEUへの加盟を進めた際、リトアニアの西欧への帰属を示す歴史的事象は盛んに記念された⁶。ミンダウガス王戴冠750周年記念がリトアニアのNAT

O・EU加盟の前年の2003年7月6日に祝われた際には、ヴィリニウス市内でミンダウガス王の記念碑も除幕された⁷。しかし、戴冠の日付に関して歴史家の意見が一致していないだけでなく、この記念自体も現在のリトアニアがそのまま中世にまでさかのぼるかのような歴史意識をもたらしかねない。

そうした歴史意識が持つ問題の一つとして、カトリックとして洗礼を受けたミンダウガスの記念が、過去のリトアニアにおける東方正教会や東スラヴの影響の矮小化につながる事が挙げられる。東方へ領土を拡大したリトアニア大公国では、貴族および全住民の多数を正教徒の東スラヴ人（現在のベラルーシ人やウクライナ人）が占めていた。だが、リトアニアでは、リトアニア大公国を「リトアニア国家」と認識することで、一般の人々や歴史家までもが、歴史のなかの東スラヴや正教の要素をわきにおき、リトアニア語話者や異教（のちの時代ではカトリック）に関連する要素に注目する。その背景には、ソヴェトの公式の歴史叙述では、リトアニア大公国はロシアに統合されるべきルシ国家として扱われていたこと、そして現在はベラルーシの研究者がリトアニア大公国はルシ=リトアニア国家だと主張し、現在のベラルーシ国家の萌芽と見なしていることへの反発もあろう。

もう一つの問題は、中世のリトアニア大公国の称揚が近世史の軽視と表裏一体である点である。リトアニアは中世を通じて国家の独立を維持し、ヴィタウタス大公のもとで東スラヴの公国の領域も支配する「バルト海から黒海へ」広がる大国となった。それゆえ、中世はリトアニアの黄金時代と称される。だが、ポーランドと合同した近世の評価は芳しくない。近世のリトアニア大公国とその貴族がポーランド化したからである。また、19世紀後半以降のリトアニアの近代ナショナリズムはポーランドからの文化的自立を求めた。独立後の首都ヴィリニウスをポーランドが占領支配したことも、リトアニア人の対ポーランド感情を悪化させた。こうした反ポーランド的な歴史理解は、リトアニア領内のポーランド人マイノリティとの関係が複雑化する一因ともなっている。

また、リトアニア史はリトアニア語を話す人々の歴史であるという考えのため、中世と19世紀後半のあいだにはリトアニア史の断絶と空白がある。記念の対象となるのは、ミンダウガスやゲディミナス、ヴィタウタスなど主に中世の君主である。逆説的なことに、婚姻を通じてポーランドとの連合を開始しただけでなく、リトアニアをキリスト教に改宗して西欧世界への道を開いたヨガイラや、リトアニアが西欧の影響を強く受けた近世の君主らは、主要な記念の対象ではない。

しかし、最近、歴史家のあいだで、政治的・市民的なネイション概念や多民族性がヨーロッパ的なものとして肯定的に捉えられるようになった。過去のリトアニアのネ

イションの言語的な基準が相対化し、近世史への関心も増大している。リトアニア歴史研究所所長の A. ニクゼンタイティスは、五月三日憲法がポーランド史だけでなく、リトアニア史の業績ともなりうると述べている⁸。戦間期に称揚されたヴィタウタス⁹とは異なって、ミンダウガスには反ポーランド的な含意がない。この点も現在のリトアニアの国際的な立場に合致しているといえるだろう。

おわりに

リトアニアでは、記念の対象となる歴史事象の選択は、社会の要求や自らの歴史についての認識、国際関係に規定されている。だが、近年のリトアニアの歴史的自己像はいくつかの問題を抱えている。歴史は非常に現実的、政治的な問題なのである。日本や多くの西洋諸国では、過去を現在の目的のために用いることは批判の対象となろう。しかし、国際的な舞台では、自身の歴史を持つネイションは、それを持たないネイションと比べて、より自己の正当化をはかることができる。暗黙のうちに、そして構造的に、既存のネイションは新たに出現したネイションに自身の歴史を持つよう要求していることも、我々は意識すべきである。

〈註〉

- 1 世俗の祝日にはここで取り上げる3つのほか、5月1日の「労働者の日」と5月第一日曜の「母の日」がある。また、リトアニアには宗教的な祝日も存在する。
- 2 以下も参照。佐藤圭史「ソ連邦末期における民族問題のマトリョーシユカ構造分析—リトアニア・ポーランド人問題のケーススタディー」『スラヴ研究』54、2007年、101—130頁。
- 3 T. Snyder, *The Reconstruction of Nations: Poland, Ukraine, Lithuania, Belarus, 1569-1999*, New Haven-London, 2003, pp.92-95.
- 4 以下を参照。野村真理「自国史の検証—リトアニアにおけるホロコーストの記憶をめぐって—」野村真理・弁納才一編『地域統合と人的移動—ヨーロッパと東アジアの歴史・現状・展望—』御茶の水書房、2006年、143—176頁。
- 5 V. Sirutavičius, “Šventės nacionalizavimas. “Tautos šventės” atsiradimas Lietuvos Respublikoje XX amžiaus 4-ajame dešimtmetyje”, *Lietuvių Atgimimo istorijos studijos*, t.17, *Nacionalizmas ir emocijos (Lietuva ir Lenkija XIX-XX a.)*, 2001, p.135.
- 6 A. Nikžentaitis, “Vasario 16-oji ir Lietuvos istorinė kultūra”, *Akiraičiai*, 2004 vasaris, p.7.
- 7 L. Aleksiejūnas, “Karalius Mindaugas atgimsta granite”, *Voruta*, nr.21(519), 2002, lapkričio 9 d.
- 8 Nikžentaitis, “Vasario 16-oji”, p.7.
- 9 A. Nikžentaitis, *Witold i Jagiello: Polacy i Litwini we wzajemnym stereotypie*, Poznań, 2000.